
星降る夜

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る夜

【Nコード】

N55690

【作者名】

まめご

【あらすじ】

——東のイラドア地方に奇妙な噂が広まった。

深夜、星の降る時刻に船を出すと、誰もいない漆黒の彼方から少女の笑い声が聞こえるという——

少女特有の潔癖と排他ゆえに海に身を投げた2人の娘のお話。

T

I I N A M I より転載作品。

東のイラドア地方に奇妙な噂が広まった。
深夜、星の降る時刻に船を出すと、誰もいない漆黒の彼方から少女の笑い声が聞こえるという。

うつそうと茂る森の中を、ベスは黙々と歩いている。

腕の中にはほっそりと儚げな少女が一人、抱きかかえられており、強い眼差しで前方を見据えていた。

「寒くはねえですか」

「平気よ」

だってベスの腕の中は温かい。とエリザは微笑んで回している腕に力を込めた。

「もうすぐ海に出ますんで、辛抱くだせえ」

「ええ」

ふわふわとした綿飴のような金色の髪が揺れる。

僅かな星明かりを捕えて輝くそれは、まるで自分たちを導くようだとチラリと思った。

「あなたの名前もエリザベスというの？」

五年前。

金色の髪を持つ新しい主は、澄んだ青い瞳でずんぐりとした縮れ髪の醜い少女を見上げた。

「そつでござえます、お嬢さま」

同じ年。同じ名。

そして同じ日に違う母親の腹から生まれた少女2人の容姿は雲泥の差だった。

月とすつぽん。美女と野獣。天使と悪魔。

神さまは酷こなことをなさる、とベスは内心溜息をついた。

「ふうん」

美少女は考えるように人差し指をふつくらとした唇にあてて、首を傾げる。

その動作に思わず身構えた。

お金持ちで美人のお嬢さまは、対外性格が歪んでいる、と若干11歳のベスは今までの経験上学んでいる。

「じゃあ、これからあなたをベスと呼ぶわ。わたしのことはエリザと呼んでね」

ささくれ一つない白い手が、あかぎれだらけのくすんだ手を取る。

驚きで動けない新しい侍女に、エリザは微笑んだ。

まるでバラが開花したような笑顔だった。

「だって何だか気恥かしいもの。これからどうぞ、よろしくね」

それから2人はいつも一緒だった。

エリザはベスを全面的に信頼しており、ベスはエリザに絶対的な忠誠を誓っていた。

なんびと

何人たりともその間に入ることのできない親密感を、大人たちは少女特有のものと理解し、時がたてばまた変わるだろうと認識していたが、そんなことは2人には失笑の対象にかなり得なかった。

エリザはベスの風邪ひとつひかない健康な体がうらやましかった。

力持ちで小さなエリザなど軽々と抱えだし、器用に壊れた物を修復してゆく手つきはまるで魔法だった。

なにより、優しい心根が大好きだった。

「わたしたちは、2人で1つよ」

ベスはエリザの儚い風情がうらやましかった。

病弱で華奢な体は保護本能をくすぐったし、ふと遠くを見るその仕草は腐敗した世界に置き去りにされた天使のようだと思ったりもした。

そして、醜い自分を初めて認めてくれた大切な人だった。

「きつと神さまは間違えて、おいらたちを分けてしまったんだすよ」

だって、わたしたちは同じ名前で、同じ年で、しかも同じ日に生まれた。

運命と言わずに何と言おうか。

少女たちはクスクスと笑う。

明るい太陽の降り注ぐテラスで、たゆむ波音を背景にして。

勿論、幸せな時は永く続かなかった。

それはある日突然やってきた。

「お父さまが…領主の後妻になれて…」

イラドアの海軍提督を務めるエリザの父は、唐突にそう命令したという。

「お父^{とう}が…庭師の所に嫁に行けと…」

宅で下男をしているベスの父も計ったかのように命じた。

年頃になった娘たちは嫁に行かねばならない。

拒否権などあるわけがない。親の命は絶対であり、子供はその所有物でしかない。

嫁いで今度は夫というものの所有物になるのだ。

2人は泣いた。

泣いてどうにでもなるものではないと分かっているけど、泣いた。

わたしたちは、ただ一緒にいたいだけだ。

エリザが、ベスが、他の誰かの物になるなんて許せない。

泣いて泣いて、涙で目が溶けそうになった頃、エリザが嗚咽をあげながら言った。

「ねえ、ベス。お願いがあるの」

そのお願いを聞いて、ベスは目を見開いた。

「勿論ですだ、お嬢さま。おいらも今それを言おうとしていた所で」

浜辺に出た。

静かな波音と砂を踏む足音だけが響く。

「そろそろ星の降る時刻ね」

「この季節は漁に出る船もねえで、静かなもんです」

用意していた小舟にエリザを下ろすと、ベスは舳先を押した。軋んだ音を立てて、それは浪間へ滑ってゆく。

櫓を取りベスは沖へ向かってこぎ出した。

対岸の灯台を目印にすれば、沖に出る。

「ああ、ベス。見て」

上を見上げていたエリザが、感嘆したように声を上げた。

闇間に縫い付けられた無数の星たちが、一つ、また一つと零れ落ちてゆく。

「なんて綺麗……」

遠慮がちに降っていた小さな光はその内、先を競うように次から次へと降り出した。

遙か曲線を描いてたなびいては、山際の果てへと消えてゆく。

「東国では月見という風習があるそうなんです」

ベスも手を止めて、視線は空に釘付けだった。

「この国の星見には敵わねえです」

「そうね」

そしてこの星降る夜に。

「お嬢さま、ここいらで」

「ええ」

2人は死ぬ決意をした。

エリザは白い手を伸ばして、ベスの頭を引き寄せる。

そして静かに額同士を付け、目を閉じた。

「神の御許で会いましょう」

ベスは無言で小さな体を抱きしめて、そのまま海に飛び込んだ。

水飛沫と気泡の音の後、黒い大海は全てを呑みこんで静寂を敷く。

東のイラドア地方に奇妙な噂が広まった。

深夜、星の降る時刻に船を出すと、誰もいない漆黒の彼方から少女

の笑い声が聞こえるという。
クスクスと、睦みあうような幸せそうな笑い声だという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5569o/>

星降る夜

2011年6月18日12時33分発行